熱血巨乳

金的先生

玉子王子　著

一章　「男の子にはああすればいいのか……」

指導方法に悩んでいた熱血女教師への爆乳熟女先輩のアドバイス

あの学校には行きたくないから勉強する……そういう人間が大勢いると噂される底辺校、大図学園。

まだ日も登り切らず、空気が涼しい朝。

その校庭に、六人ほどの男女が一列に並ばされていた。

その前に立つのは、ジャージの若い女。若いといっても生徒よりは年上の教師である。

黒髪でふわっとしたショートカットでなかなかの巨乳。美人でもあり、あまり上品とは言えないこの学校の男子生徒らの中には、チャンスがあれば無理やりにでも……と狙っているものが結構いた。

その女教師が、竹刀で地面を叩く。

目に涙を浮かべていた。

「なんでわかってくれないの！？　あなたたちのためを思って言ってるのよ！？」

――こんな底辺校でさらに落ちこぼれたら将来どうなるの？　せめて私の目の届く範囲ではまじめにさせないと。

舌打ちすらせず、へらへら笑っている男女。

女子が手を上げる。

「せんせー、言っちゃ悪いんすけど、私ら今更まじめにやったところで何かあります？　そりゃ金出せば入れるクソＦラン大学なら入れるんでしょうけど……で？　そんなところ出て、どうなるんですか？　非正規で派遣でもやりますか？　っていうか、まじめにやらないでも同じラインで行けるんですけど？」

「そうそう、俺らもう間に合わねーし、すべてに」

「まあ私らなら、金持ちのチ〇コ咥え込んで一発逆転という目も」

「俺らも金持ちのチ〇ポケツで咥え込む可能性もワンチャン」

「バカですか！　もっとまじめにしなさい！」

　まじめにした結果が何もない、と割と冷徹に見ている生徒らに、涙を流して叫ぶ熱血女教師。

「うわ、また石島泣き出したよ」

「超めんどくせー」

「女はいいよなー、泣けば解決だもんね」

「あ、私らも敵に回すセリフだよ？　キ〇タマ蹴るよ？」

「玉だけはやめてくれってばよ！」

　笑う生徒たち。

　うわっ滑りでよく泣く熱血教師に特に同情するものはいない。

　――別に俺らが意地悪して泣かせてるわけじゃねーし。っていうか俺らのほうが「同情されて泣かれてる」んだぞ？　ぶっちゃけそれ見下してんじゃねえの？　ふざけてんよなあ……まあ一様心配してくれてんでしょうけど……

　男子生徒の一人は、少しは居心地の悪い気分を味わっていた。

　やはり女が泣いているのは嫌な感じだ。

「とにかく、今日はお仕置きよ！」

　泣きながら叫ぶ大人の女性……ちょっとした地獄絵図に引く生徒たち。

　内容も内容だ。

「お仕置きだって……」

「体罰ですか先生？　これは教育委員会マターですわ」

「愛が理解されなかったなら、そうなるのも覚悟の上です！」

　顔を見合わせる六人の生徒。

「おいおい何言ってんだ先生？」

「わかんないけど、まさか竹刀で殴られないよね？」

「それはもはや警察マターだから、たぶんないんじゃないか？」

　と、端の女子生徒の前に立つ石島。

「行きますよ！」

「え、ちょあうっ！」

　ビンタ。

　バチン、といい音。というか張り手というか、フックを平手でやっているだけというか。

「んっ、あああああ、ちょ、いた……マジかこいつ……」

　よろけながらも、何とか立っている女子。

横の女子、さらに横。

次々、ビンタというより殴り倒していく石島。

大学時代レスリング部で、今は趣味で総合格闘技をやっているためパンチ力があった。

ついでに言えば、背も高く男子と変わらないのだ。

それが「平手だからビンタ」というのは無茶な話という気がする。

が、平気で女子たちを殴る。膝をつくものもいるが、気にしない。

というより、むしろ内心胸が躍っていた。

――口で言っても何の反応もないこの子たちだけど……さすがに殴られればこうなるのね。ショック受けてる感じ。もっと早くやればよかった！

女子四人を殴り、ついで男子二人。

バチン、と男子相手なので遠慮なく叩く。叩くというか力や勢い的にほぼ殴りつけている感じだが、平手なのでセーフというのが石島独自の**歴史認識**である。

「いた」

「ん……」

眉を顰める石島。

――力弱かったかな？

思いつつ、今度こそともう一人、最後の一人にビンタ。

バツン、と相当な音が鳴るが、よろけるだけで別に男子は倒れない。

「いった……なんだよもう」

「先生、これで気が済んだ？」

女子。涙が滲んでいる。

「気が済んだ……というか、お仕置きは終わりよ」

六人は文句を言いつつ校舎に向かう。

「……」

竹刀を拾いつつ、もやもやしたものを胸の中に抱え込む石島。

――思いきりやったのに、男子は割と……平気ね。やっぱり頑丈なのね、男の子って。今度のお仕置きビンタは脇腹にフックぐらいやらないとだめだわ。なんちゃって、もちろんフックなんてビンタでもなんでもないわよね。

頭の中で何を言っているのかわからない。そもそも「ビンタだよ」といっておけばセーフだろうという考え自体が無茶だろう。かなり変わった人間といえる。

いや、フックの件は冗談で考えているだけなのでいいだろう。誰でも冗談で変なことぐらい考えるはずだ。

しかし「ビンタならセーフ理論」は実際に行動に移しているのでそういった冗談とは桁が違うといえる。

「石島先生」

「あ、太田先生」

先輩女教師。外跳ねのショートカットの茶髪で、メガネ。三〇少し、もともと石島ぐらいの引き締まった体の巨乳だったが、加齢で全体的に肉がついて爆乳に格上げされた感じの体型。

おっとりした感じだが、背は石島より高い。

　女性教師を割と舐めてかかる男子が多い中、不思議と男子たちの多くは彼女には礼儀正しいのを石島は多少不思議に思っていた。

　――背が高いからかな？　そんなのことぐらいで？　っていうか私より背の低い男性教師を舐めてかかったりしないしねえ……

「派手にやってましたねー、先生」

「ビンタだからセーフです」

「大丈夫、結構なことをしても、市長さんが体罰に寛容な考え方の人だからセーフですよー」

「え、そうなんですか？！　っていうかそれ「寛容」なんですかね？」

「あら、石島先生は寛容と不寛容とどっちにつくつもりなんですかー？」

「そりゃ教師としては「寛容」につくしかありませんわ。**ほんのりリベラル寄り**が教師として**利口な立ち位置**ですからね」

「そういうこと、って何が「そういうこと」かよくわかりませんけど、体罰が許されるのは**教師としてはおいしい**ですよねー」

「なるほど、体罰ありなんだ。これまでもどしどしやっちゃえばよかったんだ。っていうか別にビンタにとどめる必要もなかったのね」

　目を輝かせる石島。

　熱血といえば熱血だが、ヤバい方向に向かいそうな危うい感じだ。

「あ、そういえばさっき男の子も殴ってましたよねー」

「殴ってません、ビンタです」

「まあともかく……男の子は頑丈だからあんまり効きませんよー、殴っても」

「え、それじゃ遠慮しろって言うんですか？　むしろ男子殴りたいですよ、女だからって舐めてる感じだし……」

「あら、そういうことじゃありませんよー」

　朝。

　ビンタのころはまだ周りに生徒らもいたが、もうあまりいない。

　遅刻した男子がフラフラと校門をくぐる。

　本来別の学校に行くはずだったが、試験の時に風邪をひいて脱落という運の悪い男、芝泉。

　巨乳と爆乳の女教師の横を通りつつ、横目で肉塊を見る。

　――おおお、いつ見てもすごいな。オッパイでけえ、デカすぎる。

　何も考えていないに等しい思考。

　その耳に、二人の会話が入る。

「男子相手にするなら、狙うところがあるってことですよー」

「え、ちょ……それって……」

　ぽ、と顔を赤らめる石島。

　ジャージの前、股間を抑える。何もない……というわけではないが、男の目立つものと対比されると「無い」印象になる女の部分。

　にま、と頬を緩める爆乳熟女太田。

「そう、そこですよー。うふふ、男の子は、そこをやっちゃうと一発。金のタマタマ、タマタマ」

「そう……らしいですね……よくわからないけど。はい、タマタマ」

「私もよくはわかりませんよー、だってついてないですから」

「そこ狙って、もしその、つ、潰れたりしたら……まあ治るんですけど、治るにしても……」

ナノテクが発達し、睾丸ぐらいなら十秒程度で再生させる、怪我を治す薬がコンビニで安く売られている世界である。

「治るにしても、そのやっぱり……」

「やだ、気にすることないですよー。男性教師なら、同じように仕返しされるかも、と思うかもしれませんけど……私たちならほら、ここ狙われても全然平気ですし」

バンバン、と遠慮なく自分の股間を叩く。驚き、恥じらいつつ笑う石島。

「やだ……」

見ているもう一人、男子生徒芝泉は思わず立ち止まり、顔を引きつらせて股間を縮ませていた。

――うわ、そんな股間を……女だから平気なのか。でもあれはビビる。

「この一発で男の子ならダウンよー」

「そうなんだ……」

「うふふ、大事な大事な金のタマタマだものー……あら」

「あっ」

「盗み聞きねー、悪い子」
「いや、すいません」
　打ち消すように、両手を前に出す芝泉。
　それに対して、素早く前に踏み込む太田。
　むにゅ、と爆乳に手が埋もれる。
「え、ちょ」
「君、なんてことするのー？　これはお仕置きね」
「そ、そんな……柔らか……」
　本能的に巨肉をもみながらも、青ざめる。
　ちら、と助けを求めるように目を石島に向ける。彼女のクラスの生徒である。
「ん、芝泉……とりあえずオッパイ揉むのやめようか？」
「あっ、す、すいません！」
「やめて済むなら、痴漢は犯罪じゃなくなっちゃうわよー」
　手を離し、慌てて距離をとる芝泉に微笑みつつ、手を開いて見せる太田。
　そしてそれをゆっくり下げて、自分の股間に近づけていく。
　パン、と音を立てて叩き付ける。自分にである。
　これから君にこうしちゃうよー、という脅し。
「うふふ、お仕置きよー」
「ひいいい、び、ビンタでお願いします！」
「仕方ないわね……じゃあビンタねー」
「オッスお願いします！」
「ただし、当てる場所は男の子の大事なところねー」
「ひイイイイビンタでもなんでもねえ！」
　慌てて股間を防御する芝泉。
「あ」
　その姿を見て、思わず声が出る石島。
　――なんだ、これじゃタマタマ攻撃無理じゃない。目の前でタマタマやられる男の子見れると思ったのに……格闘技やってりゃ見て来そうなもんだけど、私女子大だし、総合の教室も女だけだから全然……ああ、残念。
　眉を顰め、露骨にがっかりする石島。
　にこ、と笑って再び踏み込み、芝泉の胸倉を掴む太田。
　グイ、と持ち上げる。
　大人とさほど変わらない体格の芝泉。太田のほうが背が高いとは言え、片手で持ちあがるわけがない。
　だが、持ち上がる。
「うわあああああ！」
　足をバタバタとさせ、真っ青になる。首が締まらないよう、吊り下げる腕につかまる。

となれば、股間はがら空きである。

チラ、と石島を見る。パッと微笑んでいる。

「おおお、これは」

「うふふ、これが私の得意技よー」

掌を上に向けて、ワキワキと握ったり広げたりして見せる。そしておもむろに、芝泉の太ももの間に差し込む。

「あ、ちょ……おふっ」

「なるほどねー、結構ご立派サイズだわー」

もみもみ、肉塊を揉み上げる。熟女らしく、それを扱うのには熟練していた。玉の部分、竿の部分、指で押してそれぞれのサイズを確認する。

「へえ、芝泉大きいんだ……見かけによらないのね」

「ボールもバットも大きいわよー。まあバットはどうでもいいけどね」

「ちょおおおおおやめええ」

指でうまく玉を動かし、握れる場所に動かしていく。怖い位こういう展開に慣れている。

すでに震え上がっていた芝泉だが、相手の手慣れた様子に気づいてさらに戦慄する。

「あ、ま」

――ちょ、玉動かされてる。握られる、握られる位置に。もう握られてるけど、っていうか、握り潰せる位置に……う、噂、噂本当だったんだ！　こ、この先生めちゃめちゃ玉潰しに慣れてる！

「おおおおおお」

ただ、握られているしかない吊られた芝泉。横で彼と、吊り下げている太田を交互に見て目をぱちぱちさせ、ほとんど涎を垂らさんばかりの石島。

「す、すごいです太田先生」

「うふふ、こうなったら男の子はなすすべないのよー。だから口の悪い子たちはいうのよー、太田に逆らったら家畜みたいにぶら下げられて玉抜かれるって……まあ本当にそうだけどねー」

「ひいいいいい！」

「嘘よー、さすがにオッパイもみぐらいで去勢はないわー」

わずかに喜色を浮かべる芝泉。

――揉んだというか、アレたぶん触らせたよな……まあラッキーというか、今も揉まれてうれしいけど……あ、やべ、立つ……

「あ、ダメよー」

「うぎっ！」

目を剥き、唾を飛ばす芝泉。

顔を真っ赤にして飛び上がる石島。

「きゃあ、まさか玉握り潰し！？　太田先生、芝泉今日から女の子ですか！？」

「違うわよー、副睾丸をゴリっとね。デカチンチ〇が立ちそうだったから」

「ちょっと、キ〇タマ握り潰されそうになってなんで立つのよ芝泉」

「ち、ちが、揉まれて……」

「オッパイ揉んだ感触が残ってたってこと？　流石痴漢くんね」

「ちが、はぐっ！」

　握っていた手を緩め、デコピンの要領で玉を弾く太田。ビク、とのけぞるが、ぶら下げられていてあまり動けない芝泉。

　見ていて、自分の太ももを叩いて笑う石島。

「ちょおおおお！　今のデコピンの反応？」

「そうよー、タマタマはデコピンにも耐えられない絶対急所なのよー」

「やばいじゃない、そんなもんぶら下げてたら女の子様には絶対敵わないわ。男の子は玉抜いたほうがいいわよ。あ、でも抜いたら男じゃなくなっちゃうか、いやん、玉無し」

　膝を締め、股間を抑えて腰を引く。ニヤニヤと、芝泉を見上げながら。

　――ひうううう、バカにしやがって……力なら絶対石島には勝てる。多少鍛えてようが所詮女だ。でも、太田には無理……こんな片手で人吊り上げるとか……狙われたらマジなすすべなく玉握り潰される。

「まあ、一様その子、うちの生徒なんで……その辺で許してもらえませんか？」

「さすが熱血先生、優しいわねー。それじゃ、先生に免じて。そもそも、金ちゃん狙えば男の子がどのぐらい弱いか見せてあげるためのにしただけだし……」

「え、なんですかそれ？　やっぱりわざと揉ませ……はうっ！」

「オッパイ揉んだ、キ〇タマ揉まれた……取引みたいなもんだと思うのよーさもないと……」

左手で睾丸を握り、右手で吊り下げている。両手を引っ張り、芝泉を近づける。

耳元に口を寄せ、ほんわかした今までの声色とは違う、ドスの利いた声を出す。

「男の命……大事な大事なおキ〇タマ、握り潰しちゃうよ★」

「おおおおおおお」

チロチロと舌で耳を舐めながら、圧倒的な握力を睾丸に加える。ギリギリ潰れない力を調整した。

様々な玉を何個も潰してきたからこそ可能な力加減といえた。

特に、ドMの夫の玉を数限りなく潰したことが大きい。同じ玉に対してどのぐらいの力でどのぐらい握れば「お終い」なのか統計立てて把握できる。

夫の睾丸再生用にナノ薬を箱買いする太田である、**「セックス＝玉潰し去勢」**というのをお互い楽しめる幸せな夫婦だった。

「そらそら、コリコリ、コリコリ……んんー？　タマタマの感じ変わってきたかな？　あと数秒でブチっといくかも？　大丈夫、加減してるから。でも失敗したらごめんねー、そらそら、にぎにぎー、うふふ、もう潰れるかも？　大丈夫、手加減、あ、ぐちゃっ！　二個とも潰れた！　あはは、嘘よー、泣きそうな顔しちゃって、自分のタマタマでしょ？　潰れてないことぐらいわかるでしょー。でも後数秒かな、今かな？　今潰れる？　お、グチャ！　ぐちゃん！　はい金無しー。もう君、キ〇タマないよー、男じゃないねー、潰れた。うふふ、もうおチンチ〇もいらないねえ？　でっかいチンチ〇、童貞でしょ君？　童貞玉無しチ〇ポって何なのかなあ？　って、まだ潰れてませーん。怖い？　今手を緩めてもらったらタマタマは無事よー、ちょっと力込められたらおしまーい。女の子に一番大事なところの運命、男としての人生握られてる気分はどうかなあ？」

「ひうううううう」

副睾丸責めやデコピンより、今の金握り言葉責めのほうがダメージを受けている芝泉。涙と鼻水で顔面がグチャグチャだった。

「うわ、すご……おおおおお。タマタマ握って、「潰すよ潰すよ」で男の子があんなに泣いちゃうんだ……」

「うふふ、かわいいわ……」

――どうしよう？　介抱名目で食べちゃおうかしら？　陰キャ少年のデ〇チンを爆乳熟女教師がずっぽり……この子別に何もしてないのに、こんな感じになっちゃってかわいそうだし……っていうか夫にするみたいに言葉責めしちゃった、若い子にはきついわねえ。というか、ドM以外にはねー

チラ、と石島を見る。

「先生、そろそろ授業に行ったほうがいいですよー」

「あ、そうですね。それじゃ失礼します……って、芝泉は？」

「少し休ませますねー」

――まああんまり休憩にならないかもしれませんけどねー

かわいそうなことをしちゃったから、というのはかなりの部分建前だった。

実際のところ、金責めで濡れてしまったので男が欲しい、ということである。

ともかく、石島は教室に向かう。

――いいもん見たわ。キ〇タマ狙えば男ってああなのね。今度試そう。金的蹴られるとなれば、男の子ももう私の事馬鹿にしてこないでしょう。しっかり指導して上げられれば、あの子たちのためにもなるわ。

竹刀で肩を叩く。

プルン、と巨乳が揺れる。その先端がぷっくりと膨らみ、それほど男を知らない女の花園が男子生徒らへの「お仕置」への想像に濡れ始めていた。

「これはあの子たちのためよ、あの子たちのため」

　大まかにはそうだろう。

　だがかなりの分、性癖のためでもあるだろう。

　まだ男の玉を責めるのが楽しいという、ドS女子の性癖自体にはっきり気づいていない石島は、まったく意識していなかった。

体験版終わり

このあと徐々にドSに目覚め、熱血が男子に金的を食らわすことへの衝動へ向かっていく石島。

教師の権力で、女子が男子に金的するように仕向け、その流れに乗ることで教室を統率しようとします。

金責め去勢だけではなく、

イケメン君が脱がされて短小だとばれ嘲笑される短小言葉責めや

「お仕置きから逃げないように」という名目で無理やり脱がされるCFNMも。

続きは製品版でお楽しみください